

工藤恒治の教育実践からみた郷土教育観

小田嶋 悟

はじめに

本論は、庄内地方において「北方性教育運動」としての綴方教育を実践したと見なされている工藤恒治を、郷土教育の視点からとらえ直し、そこでの郷土観を探ろうとするものである。

工藤が郷土教育の実践を行っていた大正末から昭和初期において、郷土教育は多種多様なかたちで、全国的に普及していた。山形県もその例外にもれず、郷土教育の実践は盛んに行われていた。^{*1}当時山形県では、山形高等学校社会科学研究会や日本教育労働者組合金山形支部の活動に見られるような教育運動が活発に展開していた。^{*2}またその一方で、村山俊太郎や国分一太郎等のように、東北地方の各実践者と連携を取り合い、地道な実践を繰り広げる教師もいた。このように内外が混沌とした状況にある中で、工藤恒治も郷土教育の実践を行っていた。

県内の各実践者については、様々な先行研究がある。しかし、実践史における彼等の位置づけについては、必ずしも明確な状態にあるとは言えない。その意味で、まだ十分研究されつくされていない。工藤もそうした研究対象者の一人として考えることが出来る。

工藤に関しては、『山形県史』第5巻（山形県編さん兼発行，1986年，pp652～673）で概説的に述べられている。また、論文としては、佐藤和明氏によるものがある。^{*3}佐藤氏は、工藤について「北方性教育運動」の実践者と見なした上で、国語教育、とりわけ綴方教育の観点からとらえようとしている。しかし工藤は、全国の教員と広く連絡を取り合ったり、各種の雑誌に詩歌やエッセイ等を投稿していたものの、東北各地の教員と緊密な連携を保って実践した形跡は見あたらない。また、教育運動として表立った活動を活発に展開した形跡もない。むしろ、日常の地道な実践に力を入れていた。にもかかわらず、工藤の実践について、そのような観点からは明らかにされていない。

そうしたことを踏まえた上で、工藤の実践を郷土教育として考える筆者は、ここでは、工藤が、郷土を実践の中でどのように位置づけていたかということを手がかりに、そこでの郷土観を探っていく。ひいては庄内地方における郷土教育の再検討、かつ郷土教育研究の一試金石としたい。

I. 工藤の実践活動

工藤は、1916（大正5）年に山形県師範学校第2部を卒業し、東田川郡渡前尋常高等小学校的の訓導になった。その後、同郡内の泉尋常高等小学校や、広瀬尋常高等小学校的の訓導を経て、1921（大正10）年から2年間朝陽第三尋常小学校的の訓導を勤めた。そして、西田

川郡温海尋常高等小学校や、同郡内の西郷第二尋常小学校、宮野浦尋常小学校、そして東田川郡横山尋常高等小学校や、西田川郡大山尋常高等小学校などを経て、1936（昭和11）年から5年間朝陽第一尋常小学校で実践した。その後1943（昭和18）年には横山村第二国民学校の校長に栄転した。この間、1925（大正14）年に東京高等師範学校付属小学校で開催された全国訓導協議会において、文部省諮問案の答申委員として参加する、といった活動もしていた。また、その一方では、児童中心主義の教育に関心を持ち、教育の世紀社に携わっていた。彼は、「児童の村」の訓導の公募に応募する、という活動もしており、その際内定を決めるまでにいたった。しかし、地元の校長の圧力により、結局取りやめになっている。^{*4}彼は『教育の世紀』をはじめとして、『教育週報』や『綴方生活』、『北方教育』、あるいは『小学校女教員』等の雑誌に、盛んに論文等を投稿した。その間、郷土教育を重視する彼は、「研究資料として各地の郷土読本」^{*5}を集める傍ら、昭和7年に主著『郷土主義学級経営の実際』を出版した。また、大山小時代には、『大山郷土読本』の制作をリードした。一方、文学に興味を抱く彼は、高山樗牛や田沢稲舟など、中央で著名になった市内出身の文芸家に深い関心を示した。そして、「母死に給う」の句集を出したり、地元の文芸雑誌『行人』『北潮』『地霊』などに詩歌を投稿するといった活動もしていた。

II. 工藤の郷土観

1. ロマンチズムとしての側面

① 子供の童心性

工藤は、子供の内面的な純粋性を強調した。すなわち彼によれば、子供は、汚れの無い純粋な目で物事を見つめ、「与えられたものは凡て素直に亨けようとする」。その姿勢から生まれる子供の「内から」のささやきは、常に新鮮である、とする。ここから工藤は、生活の中で常に新しいものを創造していこうという子供の心の動きを見て取る。すなわち、そのような境地にある子供は「『こころ』でものを観」る。「自己の純真なりし過去を忘れた大人にはそれが出来ない」のである。この「子供達の内的な欲求」は、まわりに「囚われない生活を繰り延べてゆ」けば、自然と表出される。だから、「子供の内からのささやき」を大切にしなければならない。彼は子供をこのような観点からとらえ、それを「流動無垢」と表現した。その必然的な過程として、子供たちのコミュニケーションや自然との交流を重視した。そして、工藤はこう言う。すなわち、子供たちは「自分の想を語り得るだけの言葉を持って」おり、それは「彼等の生活にピッタリしている」。だから、「標準語を教えんがために、内から伸びようとする一切のものを損ってはならない」、とする。^{*6}「子供達は日に日に新鮮な生活を生活して」おり、「その生活の素直な表現が即ち詩」でもある。その「子供たちの一生活一詩一をまっすぐに伸してやるのが」教育者の仕事である。そうした指導が、「日本の国民として正しい立派な人間へ導く」ことになる。そして、その指導が出来て始めて、教師は「子供の生活に正しい愛を持てる人」になる。このように工藤は考えていた。^{*7}

② 童心性に基づく郷土観

自然を観察させることにより、「子供の内からのささやき」が触発される。そうすることにより子どもは素直に物事を享受する態度が育ち、読本の文章なども自然に受け入れるこ

とが出来る。そう考える工藤にとっては、言うなれば、読本も、子供の生活環境の一つとして認めるようになる。だがそれでも、あくまでも教師の焦りによる抑圧は禁物である、とした。こうして、「児童の魂そのものを育てて行く」過程の中で、「児童の生活及び生活環境と最も直接的に関わりあるもの」に、子供の郷土を見出そうとした。^{*8}学校の近くを通過する羽越線の数数を数えながら算術の授業を行ったり^{*9}、学校の裏山を登ってそこで目にする動物や植物の観察をする^{*10}といった実践も、そういう考え方に基づいて行なわれていた。また例えば、尋一の算術の授業で、店で買い物をした時の釣り銭勘定に話が咲く時、工藤は「何うも『店』のようなことをやっている、小供達は小利口なお喋りにな」ってしまうと嘆く。そして「土臭い素朴さがなくなって、金属的なひびきを帯びてくるようだ」と言う。^{*11}ここに彼の郷土観の一端をうかがうことが出来る。彼は、「小供達は生れながら自然と親しんで生長」すると主張した。^{*12}この自然は「土」と同義であり、そこに郷土をイメージした。つまりこの郷土は、「土臭」さ、すなわち生長の間に目にする自然と、子供の持つ純粋な内なる欲求とのまじわりの中に見出そうとしたものである。子供の純粋性を、郷土をまじえてとらえようとする彼の実践は、子供の視点から見た郷土が基礎であり、またそれに基づく郷土教育であった。

2. リアリズムとしての側面

① 郷土観の発展

子供のロマンチズムを重視した工藤の郷土観は、必然的にリアリズム的な要素を兼ね備えていくことになった。それは、今泉運平が言うところの、「将来の正しいリアリズム確率へのためのロマンチズム」と解することが出来る。今泉はこう言う。すなわち、「子供の空想性を無視し、子供に『短兵急』式に進歩的な思想を直接あたえようとすることは労が多くして効が少ない」ことである。「正しいロマンチズムをとり入れることによって児童の本性—興味にうったえ、将来進歩的な思想を容易に受容れることのできるような、自由な、おおらかな、感受性に富み、正しいものを愛する心情—そうした心性を養ってやる」ことが出来る。その意味で、「ロマンチズムの畑は多分に有為なる人材を成長させる可能性をもった畑」なのである。したがって、「ロマンチズムは常により正しいもの、より美しい世界にあこがれる心を養うもの、やがてはたくましいリアリズムを確立し得る可能性のあるもの」としている。^{*13}この考え方にしたがえば、子供の空想性は、「より正しいもの、より美しい世界にあこがれる心」を志向したものである、ということが言える。工藤は、子供が成長していく過程で親しむ自然に、子供にとっての郷土を見出そうとした。子供のロマンチズムから、その郷土をより正しく、より美しくしていこうとする意欲が生まれ、それがやがてリアリズムとしての側面を帯びて、郷土を発展させる原動力となる。工藤は、ここに郷土教育の意義を見出そうとしたのである。こうして、子供の純粋性を強調した工藤も、その必然的な発展として、やがて大人の視点からみた社会的事象について、実践に取り入れるようになった。その顕著な実践例が、次の『大山郷土読本』に表れた。

② 『大山郷土読本』

子供の生活に基づく郷土を、より正しく、美しく発展させようとする考え方は、工藤にとって必然的に、郷土の社会を客観的に把握する実践をもたらした。その実践例を、『大山郷土読本』にうかがうことが出来る。そこでは、「郷土をいたづらに賛美する—懐古的に見

る一態度と気持」を捨てる。そして「明確にわが大山を知」り、「もっともっとよい大山を建設」することを目指す。^{*14}その意向を組むことによって、「教材が大山の郷土生活を凡ゆる方面から理解せしむる様に選択され」、「それが生徒自身の郷土観察及び調査から」なされた。^{*15}そこでは例えば、地域ごとの新聞の頒布数を調べて、その数量の多い町については、「新聞の必要な米屋、酒屋、理髪店、醬油屋等が多いから」であるとする。また同時に頒布数の少ない地域について、人通りの少ない字の地域は、「第一にひらけないから、又必要を感じずる家がないからだと思う」と分析している。その上で、「酒屋農家などは米の上ったり、下ったりする所の相場を見て、農家は米の上った時多く売り、酒屋では米の下るような時を見て、米を多く買う」とする。また、「銀行、役場、理髪店等では人が居ない時たいくつをふせぐため、又お客が来て待たせる時、お客さんにたいくつさせないように新聞を見せたり」して、「今の仕事はどういう状態であるか、又戦争が起きるようであるかということを見るために新聞を読むのだらうと思う」、としている。^{*16}こうした実践について、工藤は、次のように述べている。すなわち、「地方の一少くも僕の郷里の一諸小学校では、郷土の礼賛と懐古的詮索とをもって郷土教育のすべてであると心得て居るものようです。礼賛せしめ咏嘆せしめることが児童の郷土への意識を、…偏狭どころか…正常に導くことだと思込んでいるのです」と。さらに続けてこう言う。すなわち、「わしが國さ式、超お國自慢では、事実、児童が微笑します。それは、児童は、勉強にもスポーツにも、努力と興味とをもってはいますが、しかし、漠然と彼等の心に浮べるものは、将来のパンの問題です。女兒ならば、郷土のどの程度の家にお嫁にゆけるか、ということが、強く彼等の脳裏に往来します」と。^{*17}ここには、『大山郷土読本』の計画・編集の指揮をとった工藤の主観が多分に入っていることを予測出来る。^{*18}そしてそれは、「理解に富む校長の力によって、二十円の予算を四十二円に差し繰りしてもらったので」制作できた、という要因もある。^{*19}彼はこの読本を作るにあたって、全国各地の郷土読本を蒐集し、読本の在り方について研究していた。^{*20}いずれにしても、『大山郷土読本』には、こうした工藤の、リアリズムとしての側面からみた郷土観をかいま見ることが出来る。

III. 工藤の郷土観をめぐる問題点

1. 郷土教育から生活指導への発展性

ロマンチズムからリアリズムとしての側面まで発展した工藤の郷土観は、郷土をとらえる上で、子供の「将来のパンの問題」や女兒のお嫁の問題といった、生活上の具体的な問題まで及ぶようになった。これは子供を取り巻く郷土について子供の側から考えるとき、そのことを前提とした郷土教育を徹底するためには、子供の生活指導まで含めて考えなければいけないことになる。

城戸幡太郎は、『大山郷土読本』についての批評の中で、こう警告している。すなわち、それは、「郷土を理解せしむるための合科的教材であって、生徒に郷土調査を行わしめる場合にも単に作文の課題としてのみ行わしめないで、歴史、地理、理科、図画、綴方、手工などの労作及びその表現として編纂さるべき」である、とする。また、「統計の目的がはっきりしていないと無意味な現象を無闇に統計してみるようなことになる」、とも言っている。^{*21}ここから読み取れることとして、この読本を作り上げた工藤には、郷土についての客観的な把握を試みた上で、単なる郷土読本、あるいは優れた文集としての範疇を超越し

て、さらに徹底した子供の生活指導にまで及ぼすべき必然性がある、ということが言える。

同じ県内でも、例えば国分一太郎が実践した長瀬小学校の地区では、身売りが頻繁に行われ、「経済的にめぐまれず、文化的に低」*²²い状態にあった。こういう地域で実践する教師は、なぜ貧しいのかと、子供を目の前にして常に考えるようになる。そうした場所で生活する子供は、大人と同じように労働をする。子供の労働は、一家の大事な収入源となる。社会の中では大人と同じ労働者として見なされる。したがって、子供の生活を原点としてそこから立ち返ろうとすれば、子供の純粋性や童心を夢想する前に、どうしても社会全体の中での子供の位置づけが必要となる。そのためには、郷土で生活する子供の生活指導について、考えざるをえなくなる。

大山小における工藤は、子供に生活上の経済的な面についても目を向けさせた。しかし、そこから子供の生活を、実践の中で改革していこうという姿勢は見られない。特高による弾圧がある中でも、なりふりかまわず、子供の生活向上を目指して地道に実践した教師もいたことを考慮すれば*²³、その点で工藤の郷土教育としての実践は、なお発展性があったと言える。

2. 郷土観の拡張性

工藤は、教労の庄内支部で活動していた太田五朗や東田川郡の教師である荒澤登志雄と親しくしていた。また村山俊太郎とも面識があった。さらには秋田県の北方教育社社友としてのつながりも持ち、特に成田忠久や加藤周四郎とは書簡のやりとりを行っていた。*²⁴彼は、県内に限らず各地の実践家と面識を持ち、数多くの諸雑誌に論文などを投稿していた。しかし、そのわりには、そうした彼らと緊密な関係を保ち、実践上の表立った活動を起こしたという形跡は見当たらない。ましてや教育運動に参加するという事もなく、例えれば彼には、郷土教育を批判する太田五朗を介して、教労からの勧誘があった。当時彼は「親兄弟を養育しなければなら」ない境遇にあり、「職を失う」ことを恐れる。そして悩んだあげく、彼は教壇は最後まで守ろうと決意し、結局誘いを断った。*²⁵

工藤の郷土観の変遷に着目した場合、朝暘小や大山小などの「学区」が変わるということは、子供の生活に基づく郷土観の発展にも影響を与えた。しかしそれ以外に、もし各地の実践者との深い交流が盛んに成されていたならば、工藤自身の郷土観は、より一層視野の広いものとなった、と考えることが出来る。そうした過程に、工藤の郷土観におけるさらなる飛躍を生み出す契機があった。工藤が社友となった北方教育社というサークル的な団体もその一つの例である。そこでは、相互のつながりの中で、それぞれが農村は農村、漁村は漁村、山村は山村としての特徴を、お互いに認め合っていた。つまり、横のつながり、連帯感が形成されてくる。活発な交流を図ることは、他地域の状況を詳細に認識することにもつながり、その分、郷土観に幅が出てくる。したがって郷土を多角的な視点からとらえることが可能となる

工藤の郷土観は、ロマンチズムからリアリズムとしての発展を見るが、その一方で、子供の童心性を重視し、ロマンチズムとしての要素が核となっている。このような郷土観をもつ工藤は、各地の実践者と、親密な連携を結び共に実践すると言うよりは、手広い交流を図っていた、と言えることが出来る。そこには、工藤の持っていた郷土観の独自性・差異性というものも考える必要がある。例えば、北方教育社同人と緊密な関係を持ちながら、「郷土」に対して、「北方」「生活台」という語をほとんど使用していないという現象

も、その点に関係がある。したがって、東北の一地域としての連帯感という次元まで、郷土観を発展させることも難しい。実際、工藤は北方教育社の社友ではあったが、同人にはならず、北日本国語訓導協議会にも出席していない。高齢であった故に活発な活動が出来なかったととらえる説もある。^{*26}しかし、そうした工藤の郷土観を考えた場合、そこには実践上の郷土についての認識の相違があったことを考慮する必要がある。工藤の郷土観からは、郷土教育にからむそうした問題点も指摘出来るわけである。

おわりに

工藤の郷土教育実践における郷土観は、子供の立場からとらえようとする、大正時代の新教育の系譜をひいている。そこを起点として、やがてその郷土観は、工藤自身が子供の生活についての認識を深めていく中で、現実的な方向へ発展していった。しかし、郷土教育において、郷土と密接な関係にある子供の生活を重視した場合、その生活指導まで深く立ち入った実践が必要になってくる。そこまでの教育観が見られない工藤の実践については、郷土観の拡張性という課題を見出し得る。すなわち、工藤は多数の実践家との面識を持ちながらも、北方教育社などの、子供の生活向上を前面に押し出す教師とは、実践上の深い提携をほとんど結んでいない。それゆえ、彼等が主張する郷土の現実性については、深い認識を持つことが出来なかった。ここには、子供の童心性を核とする工藤の郷土観の独自性、ひいてはそうした実践家との差異性という問題が浮上してくる。

本研究はまだ始めて日が浅く、資料の蒐集についても、必ずしも十分ではない。郷土教育の観点から、工藤研究の問題点を提起することにつとめつつもりであるが、短時日でまとめ上げたものだけに、事実誤認もあることが予想できる。拙稿の不明さをその分一層増してしまうことになった。お詫びし、これからの課題としたい。

注

- *1 今田信一「『郷土教育』実践の道を辿る(上)」(『山形教育』第191号, 1978年11月所収)を参照
- *2 石島庸男「1930年代山形県における教育運動と山高社研」(所収雑誌不詳, 1977年7月, 秋田大学図書館所蔵), 及び松田国男ほか「山形教労の大田五朗について」(『教育運動の発掘と研究』(教育運動史研究13号) 1971年所収)
- *3 佐藤和明「北方性教育運動における国語科カリキュラム編成の原理について—工藤恒治の国語教育実践からの考察—」(『上越教育大学国語研究』第3号, 1989年所収)
- *4 「児童の村だより」(『教育の世紀』1924年5月所収, P132)
- *5 「綴方生活」1937年12月, P95
- *6 工藤恒治「『綴方以前の綴方』の一記録」(『教育の世紀』1925年11月所収, pp134~137)
- *7 工藤恒治編『尋一補充読本』地主書店, 1930年, P8
- *8 同書, 同頁
- *9 工藤恒治「尋一の算術とは? 答える(続)」(『教育の世紀』1925年7月所収, P113)
- *10 工藤恒治「『綴方以前の綴方』の一記録」(前掲), pp131~138
- *11 工藤恒治「尋一の算術とは? 答える(続)」(前掲), P113
- *12 工藤恒治「土を恋した節」(『教育の世紀』1925年10月所収, P109)
- *13 今泉運平「おおらかな夢を」(『生活学校』1948年9月所収, P36)
- *14 山形県西田川郡大山尋常高等小学校「大山郷土読本」(学習用)巻1, 1935年, 巻頭の言葉

- *15 城戸幡太郎「『大山郷土読本』巻一を讀みて」（『教育』1934年2月所収，P148）
- *16 山形県西田川郡大山尋常高等小学校『大山郷土読本』（学習用）巻1（前掲）pp 6～7
- *17 工藤恒治「大山郷土読本に就て」（『教育』1934年9月所収，pp126～127）
- *18 拙論「郷土観をめぐる郷土教育と北方教育との比較研究－山形県鶴岡市朝暘小学校を事例として－」（明星大学教育学研究室『教育学研究紀要』第14号，1999年3月所収）を参照のこと。
- *19 工藤恒治「大山郷土読本に就て」（前掲），P127
- *20 『綴方生活』1937年2月，P95
- *21 城戸幡太郎「『大山郷土読本』巻一を讀みて」（前掲），P149
- *22 国分一太郎「科学教育のために2」（『綴方学校』1938年10月所収，P48）
- *23 拙論「北方教育社同人の實踐と教育観－秋田県由利郡同人の實踐と『生活台』について－」（明星大学教育学研究室『教育学研究紀要』第11号，1996年3月所収），及び「北方教育社同人の實踐と教育観（二）－秋田県由利郡同人の彈圧下における相克について－」（全国地方教育史学会『地方教育史研究』第18号，1997年5月所収）を参照のこと。
- *24 戸田金一ほか編著『手紙で綴る北方教育の歴史』教育史料出版会，1999年所収
- *25 松田国男ほか「山形教勞の大田五朗について」（前掲），P137
- *26 佐藤和明「北方性教育運動における国語科カリキュラム編成の原理について－工藤恒治の国語教育実践からの考察－」（前掲），及び同氏による「北方性教育運動の個人史的研究－工藤恒治の国語教育実践を中心に－」（1998年7月の第74回全国大学国語教育学会における口頭発表資料）などを参照